

《ソクラテス以前》ということ：初期ギリシア哲学の思考様式／レジュメ

内山 勝利

1. 今日のわれわれの通念的ギリシア哲学史理解は、次のように概略化されよう。

初期自然学／ソフィスト思想→アテナイ哲学の大成（ソクラテス、プラトン、アリストテレス）→ヘレニズム期の学派哲学への拡散

これは、ギリシア哲学の大成者を自任したアリストテレスが『形而上学』第1巻（A巻）でまとめ上げた記述をもっぱら踏襲して、それに必要な継ぎ足しを行ったものである。ただしこの図式の固定化は、アリストテレスによるというよりも（彼には彼自身の哲学的構想があり、それに即して導出されたものであった）、それをそのまま転用した近代西欧の哲学世界（19世紀半ばにその基調を確定したE. ツェラー『ギリシア人の哲学』に見られるように）の側にその責任はある。古代哲学の内部においては、けっしてアリストテレス的な図式が共有されていなかったことは、後のローマ時代になってから（後2世紀末ないし3世紀初）書かれたディオゲネス・ラエルティオス『ギリシア哲学者列伝』の構成や記述からも読み取ることができるし、ヘレニズム期哲学の実相解明が進展するにつれて、われわれ自身においてもギリシア哲学像の変容が促されようとしている。特に注意されるべきは、プラトン、アリストテレスによって「大成」されたものの相対化と、初期哲学（Vorsokratik）的要素の後世への根強い浸透・存続である。古代哲学を1,100年間（前6世紀—後6世紀初）のスパンで見るとすれば、前4世紀に成立したプラトン・アリストテレス哲学は、その後一旦ヘレニズム期の学派哲学の中に埋没し、紀元後によりやく「復興」されつつ、その限られた一面が新プラトン主義に糾合されていく。

2. 初期哲学はアテナイ哲学を越えて、ヘレニズム期諸学派に継承されるとともに、独自の伝統を長く維持していく。ディールス&クランツによる画期的な断片集成の実質的最終版（第5版 1934-38）の序文において（Kranzによる）、Vorsokratik とは「ソクラテス（ないしプラトン）の考え方をとる学派、したがって〈ソクラテス以前〉でもなければ〈非ソクラテス的〉でもない古代哲学を経由していない哲学のことである」と周到に注意されているように、けっして単なる時代区分の表示ではない。事実、本書に収められた思想家の多数がソクラテスと同時代ないし彼以降に活動している。さらに彼らの思想はストア派やエピクロス派の根本を担い、またピュタゴラス派の学的活動はむしろ前4世紀

以降に展開されているし、本書においてわずかな手がかりを博搜して明らかにしているように、古代アトミズムの直接的伝統は紀元前後にまで及んでいる。そのようにして彼らの全体像を見直すとき、初期哲学こそがギリシア哲学総体の基調をなしていたものと考えらるべきであろう。

3. 近現代のギリシア哲学研究において **Vorsokratiker** が改めて注目を浴びることになった最初の契機は、そこに反形而上学的＝科学的理性の哲学モデルを見出そうとすることにあつた。彼らの大胆かつ壮大な宇宙論構想は **W.ハイゼンベルク** や **E.シュレディンガー** といった当時のすぐれた理論物理学者たちの共感を呼び、**K.ポッパー** も「科学的発見の論理」の典型を彼らに見ている。しかし、少なくともそのみが **Vorsokratiker** の本然ではないことは、20世紀前半のきわめて活発な初期ギリシア哲学研究を通じて鮮明に照らし出されてくる。まず第一に注意されるのは、彼らの宇宙論はその内なる人間のあり方と直結したものとして考えられ、その「自然学」はそのまま倫理規範としてわれわれの生死を律するものとされていたことである。彼らの思想は先行者たる古代の神話宗教に拮抗しつつ、その総体性において、それが担っていたモチーフを継承するものでもあつた。最近の研究が明るみに出しているように、むしろ両者に通有するところが少なくないが、それらはけっして宗教的なものの「残滓」と見なされるべきではなく、むしろ古代宗教のもっていた「生を律する力」を宇宙論的基盤から一体的に新たに確立させる営為として捉えることが肝要であろう。

4. **Vorsokratiker** の思考スタイルもまた創意に満ちたものである。彼らはそれぞれ独自の仕方で「宇宙世界はどのように形成され、それは現にどのようにあり、われわれの生死はその中にどのように絡め取られ、そこからどのように生きるべきか」を一つの著作に纏め上げている。それらは鋭い直感的洞察に支えられたイマジネーションの所産であり、またそれを語る言葉も必ずしも「論理」に依拠してはいない。むしろ、しばしば詩的言語の持つ力を駆使しつつ、彼らの直感的洞察を無媒介的に表出している。それが彼らの思考スタイルと思想の内実に最も見合ったものであつたからである。それはまた後代の論理最優先をタテマエとする思考においては欠落してしまった何か重要なものを手放さないための方途でもあつたはずである。(なお、今回フォーラムの統一テーマである「自然と技術への問い」に関わる事柄にも適宜触れうるかぎりと言及することに努めたい。)